

紹介

● 日本史の研究第二輯 三浦 周行著

著者の前著『日本史の研究』が出版後間もなく大震災火災の厄を蒙り絶版に歸してより八年、常に國史學界發展の爲めに寄與する所多かつた諸勞作（法制關係のものを除く）に筐底深く藏するものを加へて七十三篇を菊判千三百餘頁の大著に結集されたものである。近時斯學の研究愈々隆盛に赴く時斯る大著の出版さるゝ事を大なる喜びとする。

本書の體裁は前者に倣ひ、たゞ前著では第一編文化批判中の一章であつた皇室章が皇室編となつて獨立せる事、歴史地理の篇名が都市及び港灣と改められた事である。即ち第一編皇室には皇位及び皇統、皇室と國民の二章六編が收められ、第二編文化批判は中世の文化、近世の文化、明治大正の文化、思想及び信仰、學問及び藝術、社會及び政治の六章二十八編、第三編人物批判は概論、各

論の二章九篇、第四編對外關係は日明關係、日鮮關係、外寇と外征の三章九編、第五編都市及び港灣は都市の發達、港灣の發達の二章五編、第六編史料研究は記録及び文書、圖書、史料採訪の三章八編より成る。

是等諸論文は其發表當時既に其價値の定められたものである故今再び一々の紹介は寧ろ不適當であらう。たゞ讀後の印象のスケッチを試みて紹介に代へたい。

通讀して得る印象は収録された諸論文に大別二ヶの傾向のある事である。第一は歴史の骨格をなす時代の特質と其推移とが全幅的把握されてゐる事であり第二は各時代の文化の種々相に明透なる考察が試みられてゐる事である。前者には博宏なる著者の學殖による搖ぎなき判断があり、後者には犀利なる研究による透徹した觀察がある。さうして各論文は獨立して書かれたものではあるが然し著者の問題とするものに對する諸方面よりの考察が試みられて一論文は他のものゝ補遺であり又深化であり、共に連關して一體系を形成せる事である。以下印象の一部を記して紹介の責を塞ぎたい。

第一編皇室編を設けて最初に置いた事は本書を世に問ふ著者の用意の一端でもあらう。巻頭論文として國史學近年の功績である『長慶天皇御在位決定に至る迄』の要を盡した解説以下『兩統問題の一 波瀾』『南北朝合體條件』は最も多事だつた御皇統に就ての研究として必讀の文字であり、『昭和の御大禮』は我々に最も近い思ひ出を思はせる。

第二編文化批判では中世に對する著者の研究は事新しく言ふ必要はあるまい。其中でも特に後半期に於ける庶民階級の勃興に對する考察を含む『中世の日本文明』『鎌倉より室町へ』『中世の庶民生活と信仰』『日本社會史』の諸力作が社會運動に對する關心の昂まれる現今の讀者を強く捕へる。次には明治史研究に關するものである。著者近等の努力の一部は明治史研究にそゝがれて幾多の論文が發表された。『明治史の暗黒面』が密偵の報告に據り從來何人も知らなかつた地方狀態の廣く全國に互つての新舊思想の軋轢の中に醸さるゝ暗黒面が暴露され、あの急激な變革に直面した一般人士の動搖がはつきり描

き出されて明治史の重要な一部を成してゐる。然しただこれに止らない。直ちに『明治維新成功の要素』『明治史の光明面』に於て改革の由來する所をそれを光明に導く諸相、思想的背景や諸施設を見、其成功の偶然でなかつた事を示してゐる。『新日本の大恩人ゼネラル、グラント』はかゝる建設の課題を負ふた若き日本の指導者として國民の感謝すべき彼の功績が活々描かれ、其來朝前後の事情は當時の國情を察すべき好資料である。『日本史學史概説』の全般に互る考察、特に大日本史に關する諸研究も亦注意されねばならない。大日本史の編纂事情、方針、指導精神の闡明に批判は其無二の資料大日本史編纂記録の縦横の驅使によつて研究の第一人者たらしめる。大日本史は著者に於て最も善き批判者を得たに云ふべきである。『近世の生んだ二天史家』には更に義公との連關に於て白石が批判され、『栗田寛先生』では大日本史の完成者の風貌が師事者により活々語られてゐる。第四編對外關係では特に日明外交貿易の研究が栢原昌三氏の研究に對する批評より出發して貿易の本質と其變化を説いて

私貿易を目的とする變態的の外交事情を鮮明にし、それに參與した商人階級の擡頭に及んで新らしい時代への推移を示してゐる。『應永外寇の真相』に於て著者の優れた考證が窺はれ、これは『足利義政の政治と女性』に於ても感ぜられる所である。第五編の中京都、大阪等の發達は社會研究の最も重要な部分の問題として注意さるべく、古代より近世に亙る港灣の發達研究は交通、商業、軍事上の重要な問題の解決の方向を示してゐる。第六編史料研究には『北野社記録』『青森岩手兩縣の資料』『福井縣の資料』の如き著者自身の探訪に係るもの、『島根縣史』の如き一地方史に對する懇切なる批評『東京帝國大學圖書館の思ひ出』の如き興味ある讀物が收められてゐる。此等は限られた紙數の下で印象の一部を書きつゝつたにすぎない。斯様な一文が本書の價値を損ふものなる事を恐れつゝも敢てするは、著者八年に亙る業績の成果たる大著の出版された事について人々を喜びを共にせんが爲めである。(菊判一三三八頁、索引七一頁、定價九、五〇 岩波書店發行)〔藤〕

● 日本上代史研究

文學博士 津田左右吉著

第一篇、應神朝以後の記紀の記載、第二篇、古語拾遺の研究、第三篇上代の部の研究、以上三篇より成る。第二第三兩篇については既に本誌上に紹介するところがあつたから第一篇について少しくその所論を辿つて見ようそれは著者の舊著「古事記及び日本書記の研究」の續編をなすものであり、その第一章に於て古事記に見える應神朝以後の種々の物語を檢討し第二章に於てそれに對應すべき部分の書紀の記載を批判し、次いで第三第四章に於て武烈紀以下天智紀迄の記載を解釋し第五章に於て書紀の編述の經過とその史料としての意義及價値を論じて居る。

著者が書紀を見るところは第一にそれが編纂物であるとするこゝであつた。従つていかにしてそれが編纂せられたかを考へ、書紀の記載事項を分類してその有り得べき事有り得べからざるを區別し、應神紀以後の記事も事